

『マックス・ヴェーバーの犯罪』の英語圏とドイツ語圏での出版

理学療法学科 羽入辰郎

背景：（1）1984 年、ドイツにて「歴史的-批判的ヴェーバー全集」として、*Max Weber Gesamtausgabe*（以下 MWG）の刊行開始。

（2）1993 年、ドイツの学術誌 *Zeitschrift für Soziologie* に拙論掲載。『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（以下『倫理』論文）において、ヴェーバーが古英訳聖書を実際には見ていなかったこと、実は全て NED (*A New English Dictionary=OED* の前身) の calling の項目に引用されていた用例の孫引きだったことを論証。

（3）MWG の予約購読者の三分の二が日本人研究者であることに MWG 編集部は気づき、日本でヴェーバー研究が盛んであることを初めて知る。同年、日独ヴェーバー・シンポジウムがドイツで開催される。同シンポジウムの席上、安藤英治成蹊大学名誉教授はヴォルフガング・モムゼンと激論となり、「日本ではヴェーバーの“Beruf“-概念に関する論証が疑わしいという研究まで既に出ている！」と激高して筆者の論文に言及。

（3）翌 1994 年、フランスの学術誌 *Archives européennes de sociologie* に拙論掲載。『倫理』論文においてヴェーバーが使ったルター聖書は、本物のルター聖書ではなく、「現代の普及版のルター聖書」に過ぎないこと、したがって“Beruf“-概念に関するヴェーバーの論証は崩れることを論証。

（4）2002 年、我が国にて拙著『マックス・ヴェーバーの犯罪』刊行。東大名誉教授折原浩氏との間で「羽入-折原論争」勃発。折原側に与した丸山尚士はドイツに向かい、ヴォルフガング・シュルフターに報告。シュルフターは丸山に対し、「静かに、静かに」と。

（5）2008 年、二冊目の拙著『学問とは何か―「マックス・ヴェーバーの犯罪」その後』を刊行。折原氏の四冊の本の論拠を全て叩き潰す。「羽入-折原論争」終息。

（6）2014 年、MWG での『倫理』論文の出版が迫る。が、出版社が決まらぬため、電子ブック Kindle eBook で出版。同時に、プリントアウトのコピーを世界の主だったヴェーバー研究者と学術誌編集部へ発送。その一部はシュルフターにも送られる。その一か月後に刊行された MWG は、*Editorischer Bericht* において、ヴェーバーが「現代の普及版のルター聖書」しか使っていなかったことを認め、脚注において、「最初に研究されたのは Tatsuro Hanyu によってである」と記した。

目的：『職業としての学問』を学生たちに説き、学者の鑑とまで崇められてきたマックス・ヴェーバーが、彼の代表作『倫理』論文において詐術を働いていたことを世界に明らかにすること。

研究内容・方法：MWG 以上に、テキストとそこで用いられている資料との徹底的な批判的手法を用いた。資料による検証は、学問の基本的作業のはずである。ところが、従来のヴェーバー研究ではこれがなおざりにされてきた。学問の基本に徹底的に立ち返ることを目指す。

研究成果：ドイツ語版と英語版の出版。

本研究によって、ヴェーバーの誤魔化しばかりか、彼をアメリカに紹介したタルコット・パーソンズの誤魔化しもまた明らかとなる。